

「HSK 季刊わたぼうし」 第51号

発行者:わたぼうし連絡会
発行日:2000年(平成12年) 7月28日'00 夏号

第51号のテーマ 「私の介護体験 I」

「運命」の二字を 引きずる車椅子

比呂雪

この機関紙は障害のある人、ない人が自由に考えを出し合い、主義・主張を越えて、お互いを理解し合う中から共に生きる豊かな社会を作っていくことを目的として発行しています。

テーマ 「私の介護体験 I」

介護のテーマに取り組むにあたり 障害者支援施設 利用者・編集責任者

この4月より老人福祉に介護保険制度がスタートし、介護サービスの重要性が高まってきました。若い障害者の方、障害者施設の利用者の方には、介護保険は身近ではありませんが、NO.50で掲載した「2000年からの障害者福祉」のように平成15年4月より障害者も市町村役場の措置制度から介護保険制度に近い形の利用者本人と福祉サービス提供者との契約制度になる予定です。

これは、今までにはなかった利用者が、福祉サービスの提供者を選択ができる画期的なことです。しかし、利用者本人の自己責任が重くのしかかってきます。その流れを踏まえ、時代の流れに沿った紙面を提供していきたいと思っております。

今後、食事、入浴、排泄などの具体的に取り組んでいる現場の様子、生の声も掲載していきます。第1回目は青山彩光苑の食事サービス課を掲載しました。

このテーマの意見をいただく前に、最初に七尾市の老人保健施設「和光苑」ケア・マネジャーのT.Aさんに「介護保険が始まって」について語っていただきます。

なお、「HSK季刊わたぼうし」で使う介護の用語は現在、福祉の現場で使われているものを使っていきます。難しいと思われる用語は解説を入れていきます。ご了承下さい。

介護保険が始まって

地域住民・老人保健施設「和光苑」ケアマネジャー

4月から介護保険制度がスタートしました。3～4年前にあるお年寄りが私に話をしてくれていたことがあります。介護保険制度になったら病院にかかるのと同じように、保険証を持って自分の気に入った施設に入所したいといえば入所できるようになるそうだね、と。いろいろな期待を背負った介護保険制度は、残念ながらそういうわけにはいかないようです。

65歳以上の方は皆さん介護保険の保険証がお手元に届いています。医療保険とは違い、持っているだけでは意味がありません。認定というものを受ける必要があります。その認定で「非該当」つまり自立と認定されると介護保険のサービスを利用することはできません。「要支援」と認定されると、在宅サービスのみが利用可能となり、I～Vのいずれかに認定されて初めて施設、在宅の両方の介護サービスを利用できるという仕組みになっています。さらにそのサービスも好きだけ、というわけにはいきません。それぞれの介護度に見合ったサービスの量が決められて、介護が必要な方の生活をその枠の中で考えなくてはなりません。

介護とは、日常生活を営むときに不都合なことに対して援助していくことです。その人の生活能力や生活の仕方にあわせて、その人らしい快適な生活をフォローしていく必要があります。人はそれぞれ生活の仕方も違い、快適と感ずることもいろいろです。生活と密着している介護も、単純にどれだけの援助が必要かというだけで枠を決めるのは難しいことです。ある人は毎日入浴できないことが生活に支障があると感じ、ある人は3日に1度

で十分快適だと感じるかもしれない。毎日5品以上おかずを作ることができないと都合が悪いと感じる人もいれば、1日2食で十分と言う人もいるかもしれない。生活とはそれぞれの生き方や価値観が大きく影響しており、それに伴って介護の必要性も様々です。介護という一つの物差しだけで人を判断され、生活の枠を決められるというのは、何とも不都合なことだと感じます。

特に私の仕事はケアマネージャーとあって、在宅で生活している方々とサービスを提供する業者との橋渡しをする役割です。サービス利用の希望は寝たきりだとか歩くことができるとかではなく、生活の仕方や家族関係が大きく影響するものだと感じ、介護度で枠を決められていることにはがゆい思いをすることが多いです。しかし、介護保険制度は産声をあげたばかりです。この制度をどのように育てていくかは我々、関わっている者と利用者である介護を受ける方、介護者の方々です。今はお年寄りが中心ですが、今後若い身体障害者の方々も加わっていくことになります。いろんな意見を出して、みんなで一緒に介護保険制度を一人前にしていきましょう。

主婦から介護の世界へ

地域住民・障害者支援施設 介護職員

私が介護の仕事をしたのは2年前になります。実家は九州の福岡で、結婚前まで住んでいたのですが、両親や妹たちとは遠く離れ、この石川県七尾市にやってきて20年になりました。その間、祖父や祖母が亡くなり、死に目にも会えず、悲しくも寂しい思いをしたことは、今でも忘れられません。

介護の世界に飛び込んだのは、そのことがきっかけだったのかも知れません。遠いために病気の祖父や祖母の世話ができず、胸を痛めた日々を何らかの形でこれからの人生が誰かのためになり、役に立てれば……。

この仕事に就く前に、七尾美術館に勤務していたとき、障害を持った方が見学に来られ、ゆっくりゆっくり車いすで絵を見ておられました。その方の輝く目を見て「あっ！ これだ」と思ったのです。

私の子供たちが私を必要とするように、他人に自分が必要とされ、経験がなくても、いろいろな形で光を与えてあげられるのではないだろうか？ 誰かの役に立ちたい、これからの人生、何か一つ、人のために働いてみるのも良いのでは、いてもたってもおられず、胸がジーンとなったのを今でも覚えています。私にできることを提供し、喜びや悲しみを一緒に分かち合いたい。

初心を忘れずにと毎日働いていますが、青山彩光苑の利用者の皆様には、まだまだ十分な寮母ではないと、毎日が勉強です。皆様に教えられ、支えられて今日までやってきました。Nさん！と呼ばれ、明るい笑顔を見るとうれしくなります。今の私にはそれが力の元になっているように思われるのです。入社して続けてきたこと、それは、私も大好きである花で、皆様の心に安らぎを与えると共に、ホッとするひとときを提供できればと、花一輪活動を続けています。私の希望は自分の体が健康であることと、3人の子供たちに私の姿を見て、何かを感じてもらえればいいと思っています。

介護の現場を語る

母のばか力介護と自己の可能性への道

羽咋市・東山 春充

地域住民・肢体障害 校正協力者・友人

20歳の誕生日を迎えて間もない頃に、自損事故で頸椎四番骨折の重傷を負い、それが原因で肩から下の感覚全てが麻痺して、自分の意志で手足を自由に動かすことができなくなってしまいました。

そんな僕が唯一、自分の意志どおり、自由に動き回ることができるのが電動車いすに乗っている時です。電動車いすは正面にあるコントローラーをアゴで操作し『動かした通り！思った時に！思った場所へ！』自由に移動できるので今では身体の一部になっています。止まる時は、アゴをコントローラーから離すと自動的にブレーキが掛かって止まる様になっているので、人の力で押しても引いてもビクともしないし転がって行くことのないよう安全かつ簡単に設計されています。かなり急な下りや昇りの坂道を移動する時は、コントローラーのスピードを“高速”に設定していても微妙なアゴの動きで、その場の状況に合わせて“超低速”に調節するコツを覚えたので、怖いという感覚はありません。“高速”にしてあるとスピードは大人の早歩き程度のスピードが出ます。

当たり前の話ですが、車いすで階段は登れないし、段差のある所を進むことも無理なのでスロープやエレベーターがあると、あまり人の手を借りずに簡単に移動ができるので便利です。また、“貧血”になって辛くなったりすると“リクライニング”のレバーをアゴで操作して横になることができます。この様に自分の体に合ったタイプの電動車いすを使っています。

僕のように動けない者にとって一番怖いものに“褥創”というのがあります。ずっと同じ体位でいると、一定の場所に負担がかかって血行が悪くなって傷になってしまうのです。ほんの少しの傷だと思っても、なかなか治りにくく最悪の場合、内蔵まで腐食して命を落としてしまうこともあるので気をつけたいものです。褥創予防として、一定の場所に圧迫を与えない様、2時間おきに体位変換をして身体の向きを変える必要があります。

補助装具としてベッドの敷きマットには空気が入ったり抜けたりすることで圧迫を軽減する「エアーマット」と、真ん中に穴が空いているドーナツ型の「円座」を敷いています。僕の場合、辛くなると汗っぼくなるのが信号となって限界を感じ、体位変換をするので褥創になったとしても軽い傷で済み、治りも早く助かっています。

もう一つの褥創予防に入浴があります。

入浴は、短パンとTシャツ姿の母が1人で部屋のベッドから風呂場まで抱きかかえて運んでくれます。ちなみに、この短パンは僕が中学時代に陸上の大会へ出場していた頃の物でかなりの年代物ですが、ここでも活躍するとは思っていませんでした。洗い場では、足を投げ出して頭を爪先に付ける「くの字」型で何とかバランスを保ち、直接タイルの上に座っています。石鹸で身体を洗ってから母は片方の手で背中を、もう片方の手では膝を持って洗い場にいる僕を抱きかかえ浴槽のお湯に入ります。浴槽から上がる時は、入る時と

同じように母に抱きかかえられて部屋のベッドまで運んでもらいます。このように毎日入浴することで、血行が良くなり、肌のトラブルも少なく、関節が曲がり易くなっているのは母のバカ力のお陰なのです。そんな母のバカ力を出させているのも、何かがそうさせているのだと思っています。

たくさんの自由を失った中でも楽しみなはずの食事は、全て人の手を借りなければならず、正直言って不便なことが多いです。例えば「次はアレが欲しいな」と思っても全く違う物が口に運ばれてきたり、食べ物や飲物を口に運ぶペースが早かったりして、思い通りの食事ができないことから、食べることで体が面倒くさくなって、母は食べ物を差し出してくれますが、言葉と態度に出ちゃって口喧嘩になるのは、いつもの食事風景でお決まりなのです。その点、カレーライスだと皿もスプーンもひとつで済み、食べる方も食べさせる方もお互いに楽で、好きな食べ物のひとつでもあり、理由でもある訳です。また、飲物は顔の横に置いてもらうとストローを使って自分のペースで自由に調節しながら飲める喜びで、胃袋の満足感も倍増します。

電話は、息を利用して自由に電話ができる“シルバーフォン”をNTTから探していただいて、口が届く位置に呼気装置をセットして使用しています。これで誰からの電話か気にならないし、何よりもベルのうっとりしい音にも煩わされることもなくなりました。

“羽咋市在宅総合サービスステーション”からは、訪問看護婦さんとヘルパーさんに、それぞれ隔週で月2回ずつ来てもらっていて、1回2時間と訪問時間も決まっています。1日のほとんどをベッドの上で過しているのでも、運動不足解消に車いすに乗るようにして、天気の良い日は気分転換もかねて散歩に付き合ってもらっています。

家から20分ほどの富山県氷見市の天狗山を散歩コースにしている、その休憩所にある自動販売機で缶コーヒーを飲んで帰ってくるのを恒例にしています。運が良い時には遠くに立山を望むことができ、変わっていく山の匂いや風景と一緒に自然を身体いっぱい感じて車いすを走らせるのです。

我慢していた歯の痛みも限界に来てしまった時のこと

今の今まで行けるとは思っていなかった歯医者へ治療に通えるようにと、ヘルパーさんが電動車いすのまま乗り込める、市の“友抱号”を手配してくれました。なぜ、“友抱号”かという、治療台に座れなくてもリクライニングを倒せば治療ができるということで電動車いすで出掛けなければならなかったこと、また、この電動車いすは普通の車いすに比べて大きく、重量も約60キロと重いため、家の普通車に積み込むことができなかったからです。“友抱号”の利用日数は限られていて、何日も通院できないことから特別に1日ばかりで治療してもらい、長い間の痛みも見事に完治した代わりに、口の中に“キラリ”と光る物が増えました。心配していた段差の多い玄関も持ち運びができるスロープを用意してくれたので移動もスムーズにできました。

どうしようか自分一人で悩んでいたのが、訪問看護婦さんとヘルパーさんのアドバイスで何処にでも行けるという自信になって、改めて二人の偉大さに感謝しています。外の世界と付き合う機会が少ないので、いかに情報が必要なのかを知り、こんなことだったら早く相談しておくんだっ！と“ちょっと損した気分”を味わいました。

病院生活で何気なく“口でペンをくわえた”のが何もかも始まりで、口で文字や絵を書くきっかけとなりました。“震えまくる文字”でも案外うまくいったので、退院してからも怠けきった頭の刺激と首の運動代わりになればと思って、音楽の好きな僕はラジオ番組にリクエストをしたり手紙などを書いている内に、自分をアピールする手段を見つけたのです。しかし、ペンを使って文字や絵が書けたとしても「先が見えない」といった、現実が見えてくるようになってきて何もかもが“あきらめ”となってしまう、不安が増す度に焦りを怒りに変えてしまう素直になれない弱い自分がありました。

ある主婦の方のボランティアで、初めて講演をした時の『講演文』と少しの『絵』を載せたホームページ作成と管理者代行をしていただきました。しかし、その頃はパソコンを持っていなかったの、内容を印刷してもらって初めてホームページの存在を知ることになったのです。それから、ワープロで打った文章を更新していただいたことがパソコンとの世界と出会うきっかけになったのですが、この時はまだ1日の大半をパソコンと共に過ごすほど深い付き合いになるとは、夢にも思っていませんでした。

その後、羽咋市ボランティアセンターの方達が「自立の第一歩」として「パソコンを購入して世界を広げよう」という有り難い話を持って遊びにきました。そこで、自立というからにはパソコンと周辺機器に掛かる資金を捻出するため「絵葉書とカレンダー」を販売し、手を使わずに頭の動きと息の加減でパソコンを操作する“Head Master”(入力補助装置)を使用することで、自由にネットの世界を楽しめる環境を整備していただきました。

さて、僕のホームページのタイトルになっている「Woodpecker」というのは、ワープロのキーボードを口にくわえた棒でコツコツと打っている姿を見た人に「キツツキみたい！」と言われたことからネーミングしました。ホームページの表紙になっているイラストとタイトルの文字は僕が口でペンをくわえて書いたもので“壁紙”もボランティアで作成していただき“手作り”という感じのホームページになっています。

「Woodpecker」が一人でも多くの方に「可能性への挑戦」につながる勇気を与えることができれば、こんなに嬉しいことはありません。今まで外の世界から自分自身を隔離してきたけれど、ほんの少しだけ勇気を出して飛び込んだ外の世界は僕の心を強くしてくれると同時に、大きな安心となってきています。たくさんの自由を失ったことで、何をすることも人の手が必要になってしまったけど、素晴らしい人との出会いの中で「障害は不便だけど、不幸じゃない」ということを教えていただきました。

東山 春充さんの作品集



シリーズ『介護保険を考える』③

特定非営利活動法人・自立生活センター
ハートいしかわ 理事・須戸 哲

介護保険がスタートして2ヶ月。最初は目立たなかった苦情や制度の不備が見え始めてきています。2年前まで、一緒に働いていた高齢者福祉の現場の仲間たちはもう、疲れ果てたという様子です。

人権擁護という視点が大切

さて、これが最終回になります。前回にお約束した福祉の制度を破る人権擁護の確信犯として、受けられないサービスを受けられるようにできるという話をしたいのです。でも、この話をすると、須戸さんはそういうことができる性格だから(性格が悪いというか、無理を承知で押し通す性格を指していると私自身は思う)という答えが返ってきます。私自身、自分の性格を私なりに把握していると思いますので、なかなかこの意見を否定することはできません。しかし、私が福祉現場にいる意味はそこにこそあると思っています。福祉の法律や制度の中で、人間が人間らしく生きていけることが可能なら、その法律や制度をスムーズに動かすことに全力を注げばよいのですが、現実はそうではありません。

制度の枠をはみ出すケースに

たとえば、先日、介護保険の中での短期保護について、考え方と運用が訂正されました。このことをご存じの方は多いと思います。でも、このことは介護保険が始まる前からわかっていたことです。要介護度の低いランクになった方が短期保護を使いづらくなること。しかし、現実の生活で緊急にこの制度を利用しなければならない状況が起こりうることは、現場で相談業務の経験のある方ならわかっていたはずですが。介護や看護の現場から初めてケアマネジャーになった方はわからないかもしれませんが。(ペーパーテストと机の上で研修しただけの人が、ケアプランを組み立てるわけですから)こういう制度の不備はおそらく次々にでてくると思います。制度の不備ではなくても、特別な事情を持つ高齢の方やその家族のケースもあると思います。ケースが例外的で、制度の枠に入りきれないというケースです。本当は人間が人間らしく生きるという視点で考えると、ほとんどのケースが制度の枠をはみ出すだろうと私は思っています。これは高齢者福祉も障害者福祉も同じ状況です。

制度を柔軟に動かせる力

42歳の脳性麻痺の車いすの方が、父親の高齢化で、家庭で家族の介護で入浴できなくなりました。このケースが、以前の在宅介護支援センター(現在の在宅介護支援センターは役割が大きく変わって、このような相談は受けられなくなっています)に相談がかけられたとします。ワーカーは高齢者の相談ではないので、市役所の障害福祉課を紹介します。でも、その市には身障のデイサービスはありません。最初から打つ手がないのです。人権感覚を身につけた専門家は迷わず、高齢者のデイサービスでの入浴を利用しようと考えま

す。いろいろな相談機関にたらい回しにされて、結局できませんでしたというのは当事者にとって屈辱以外のなにものでもありません。素速く、的確に問題を解決する能力。時には行政に福祉制度を拡大解釈させ、柔軟な対応を促す。それがが必要だから、人権感覚を身につけた、福祉の専門家が必要なのです。

障害者に介護保険は必要か

このことは介護保険だけではなく、福祉現場と言われているところ、全てに共通して言えることなのです。このシリーズは現在の介護保険に焦点をあてているので、高齢者が抱える問題からの話になりますが、間違いなく、何年か後に障害を持つ人もこの保険制度に取り込まれる可能性があるのです。可能性といったのは大阪、名古屋、東京などの大都市圏から、「介護保険は障害者にはいらない」という運動が起こっているからです。石川県で施設や在宅におられる障害を持つ人は自分の生活が「人間らしく」過ごせているのかを振り返ってみる必要があります。施設ではどうでしょうか。第1回に紹介した名古屋のAJUの山田さんは「私の施設生活はほとんど監獄のようでした」と語っています。成人した大人が行きたいところに行けない生活を過ごしていませんか!。

初めまして"レストラン彩"です

「青山彩光苑」食事サービス課

当苑"レストラン彩(あや)"の営業内容及び食事介護について紹介します。"彩"は平成9年に、主に療護施設を利用している皆様の「主体性」を尊重することを目的として、食堂からレストラン化を図りました。営業時間は朝7:00~9:00(ラストオーダー9:00)、昼11:00~13:30(ラストオーダー13:30)、夕17:30~19:30(ラストオーダー19:30)で、時間と座席を自由に選んでいただいています。お客様が来店してからのオーダーシステムで、その場でメニューを選んでいただき、温かい料理、冷たい料理がいつも適温で提供できます。その他サービスとして喫茶、午後のティータイム、お酒のサービス、その他各種イベント等、利用者の皆様に喜んでいただけるサービスを目指して研究しています。



食事介護については、現在24~5名程度の方が何らかの介助を必要としており、皆様と同様にレストランを利用していただき、基本的にはマンツーマンの介助をモットーにしています。一人ずつ食べ方や飲み込み具合が違いますので、如何にその人の状態に合わせての介護ができるかが大切かと思えます。上手に食べれない方に対して、すぐに介助するのではなく、自助具の使用や坐位姿勢を工夫すること、又、料理形態を見直しするなど、本人の自立性を高めるような配慮も大切だと思えます。料理形態は、個人の摂食、嚥下(えんげ・飲み込むこと※)状態を考慮し、5段階の刻み食、介護食を提供しています。

食事には「空腹」を満たし、おいしいという「満足感」が求められています。環境や接遇態

度に配慮し、心から満足していただけるような食事、レストランづくりに努めていきます。

《セレクトメニュー》

和食とパン食、定食、麺類、デザートセレクトなど、毎日、セレクトメニューが取り入れられています。

介護福祉用語の解説ルーム

※嚥下(えんげ)

食物が口腔から咽喉部へ送られ、食道を下って胃の噴門に至ることをいう。食物が咽頭粘膜に触れると、反射的に飲み込む運動が起こるが、このとき食物が気管に入らないように口蓋帆が上がり、鼻腔への通路をふさぐとともに、喉頭の壁が気管の通路を保護するために持ち上げられる。続いて食道に蠕ぜん動が起こって食物は胃に送られる。

(介護福祉用語辞典・中央法規)

私のホームページ

障害者の心のふるさと、車いすの方も泊まれる皆様のお宿「まるとよ苑」

<http://www.surfboard.co.jp/yado/marutoyo/index.html>

「まるとよ苑」

「まるとよ苑」は車いすの方も泊まれる皆様のお宿として平成5年10月9日、福井県三国町にオープンした旅館です。昔は10年一昔とっていましたが昨今のめまぐるしく変わる環境では7年でも相当前に感じてしまいます。

私の家族には車いすを常用している子供がおりまして、当時旅行にでかけると泊まる所、トイレ、段差、通路の狭さなど、思うようにいかない不便さを感じていました。そんなある日、『子供のように、障害を持つ者が気楽に集える場所を造りたい。働ける場所を提供したい』と思い計画を始めたのです。とはいえ今でこそバリアフリーが当たり前になりつつありますが、

相談にいても個人でそこまではできないと笑われるばかりで、もちろん助成など受けられませんでした。

それでも皆様のおかげでなんとかオープンできたのですが、開苑して想像以上に障害をもたれた方の利用が多く、またその障害の種類の高さに驚かせました。どう対応すべきか迷うときもありました。少しでも要望に答えられればと客室を和室から洋室に変えたり、浴室に鍵をつけ介助者との入浴を可能にする、混雑緩和のため浴室を増築するなどしてきましたが日々勉強させていただいております。

さあこれからというときに阪神淡路大震災やナホトカ号の重油事故などがあり苦しい時

期もありました。しかし、数年前からは全国各地80あまりのサイトにリンクの承諾をいただき、館内や周辺観光地を紹介したホームページを開設したこともあり、北海道から沖縄、小笠原からもお越しいただけるようになりました。

当旅館への仮予約もでき、お客様とのコミュニケーションの手段として、いってみないとわからないというような不安解消にも役立っております。同じころ、第1回全国『人に優しい宿づくり賞』を受賞したことで、やってきた方向が正しかったと実感できました。

今後は、旅館の南の田地を花畑とし埋め立て四季折々の花園に囲まれて、障害を持つ友の皆様が1泊の宿泊で心安まる環境にしたいと考えております。

たとえば寒風の中、白い雪の中でもビニールハウス、ガラスハウスなどを利用し梅や桜などの花見大会を催したい。こんな夢を実現して皆様と喜びあえたらなどの計画がございます。障害を持たれた方が気軽に集える心のふるさとのような旅館になればと考えております。一人でも多くの皆様が、「まるとよ苑」をご利用をいただきますよう、心よりお願い申し上げます

「まるとよ苑」への問い合わせ先

〒913-0001

福井県坂井郡三国町池上115字2-2

TEL 0776-82-3678 FAX 0776-82-8270

E-mail: marutoyo@quartz.ocn.ne.jp



このコーナーは福祉関係の情報を発信している方々のホームページを紹介します。あなたのホームページの紹介を600～800字程度にまとめ、表紙(トップページ)の画像ファイルを添えてEメールでお送り下さい。

第5回中部ブロック電動車いすサッカー定期大会(石川大会)の報告

日時：平成12年4月23日(日)

場所：松任総合運動公園文化体育館

今大会は、地元開催ということでみんないつも以上に力が入った大会でした。結果は、2回戦敗退という結果でしたが、1回戦の相手は昨年、静岡の大会で大敗を期したチームで雪辱を果たすことができ、進歩の成果が見えた大会でした。

また、今回は大会の資金集めを受け持ち、手伝わせてもらい、大会を開催する大変さも少しは学ぶことができ、意味のある大会でした。

最後に、大会関係者、ボランティアの皆さん、ご苦労様でした。



－大会前の選手宣誓－

石川県のチームの試合結果

1回戦：金沢ベストブラザーズ(12)

対一粒パワーズ(愛知県)(0)

NOTO青山ボンバーズ (2)

対S.M.F.C.プレイヤーズ(三重県)(2)

PK戦3-2で青山の勝利

2回戦：金沢ベストブラザーズ(1)

対MAX(三重県)(5)

NOTO青山ボンバーズ(0)

A.M.F.C.エスカルコ(愛知県)(9)

試合成績

優勝 Wings(岐阜県)

2位 A.M.F.C.エスカルコ(愛知県)

3位 MAX(三重県)



※なお、「HSK季刊わたぼうし」も今大会に協力をしました。

青柏会記念展

今年(平成11年)は七尾港開港百周年・市制施行60周年の節目の年です。市当局では各種の記念イベントを企画実施しています。私は外出を通して、幾つかのイベントに積極的に参加しました。

まず、七尾市最大のイベントとして知られる、5月3日～5日の3日間にわたる青柏祭への参加です。青柏会事務局長中村敏昭氏から、七尾郵便局ミニギャラリーで開催する『七尾港開港百周年・市政施行60周年記念展』へ、私の『でか山』の絵を展示したいと電話があり、4月20日に七尾郵便局総務課の高沢氏にご来苑され、『でか山』の絵を持って行かれました。記念展は4月26日～5月14日まで展示。終了後『でか山』の絵を3枚ならべて撮った写真とガラス入り額縁、コーヒーセットまで添えてお届けいただきました。

元消防士、加藤氏製作の10分の1の『でか山』の模型も展示してありました。加藤氏は事故で車いす生活の重度障害者です。『でか山』の模型を作るのに室内をいざりながら移動。すべて手作りで1台作るのに2ヶ月もかかる根気のいる手仕事です。その作品は思わず「う……ん！」。唸る程のでき栄えでした。大好評で注文もあるが製作が追いつかないそうです。記念展へは青柏祭見物をかねて行きました。去年は青柏会関係者と聴覚障害者、手話のボランティアの人たちが一緒でした。今年は一人で仙対橋畔から車いすで慶応橋へ移動、シンボルロード側の橋詰めに陣取り、念願の『でか山』3台の揃い踏みの写真を撮ることができました。

日本丸見学

去る5月9日、七尾港へ初入港した日本丸は『海の貴婦人』と言われるわが国最大の帆船で、運輸省所轄の航海練習船です。船長を始めとする乗組員と、国内の商船大学や高等商船専門学校の航海、機関、無線科の学生が航海の実習のため乗り込んでいます。

車いすでの船内見学は無理だが、写真を撮るだけなら……と思いタクシーで出かけました。パトリアでパンと毎日骨太で腹ごしらえ。パトリアから矢田新第二埠頭まで、往復とも車いすを漕いで行って来ました。平成7年の『海の日』に、護衛官を見に車いすで往復した経験があるから苦になりません。ことの序でに、前々から心に留めていた与謝野晶子歌碑を尋ねました。

☆家ごとに珊瑚の色の格子たつ能登の七尾の御祓川かな

紅殻塗りの家が軒を連ねていた。往時の御祓川界限のイメージが思い浮かびます。川も生活雑排水による汚れのない清流だったことでしょう。現在シンボルロードと一体で整備中です。早く鯉や鮒が住める清流に蘇るよう願っています。それから日本丸が停泊している、矢田新第二埠頭を目指して車いすを進めました。

♪船は帆まかせ 帆は風まかせ 俺は気ままに 車いす漕いでよ……

海の貴婦人 日本丸 見学に……♪

口から出まかせの根深節(ネギには節がない音痴)の歌を口ずさみながら、急がず慌てず行きました。

☆車いすの背、なが帆となる卯波風に吹かれ日本丸見に埠頭へい行く
(いは古語。語調を整える接頭語です)。

埠頭入り口で市職員か、ボランティアの人が整理券を渡され、何か言われたが分からないまま車いすで移動。50メートルもある帆柱が収まる位置を定めカメラを構えました。そこへ整理にあっていた人が来て、声をかけ車いすを押し始めたのには、ちょっと面食らいましたが「日本丸の船内見学をさせてくれるらしい……」と分かりました。タラップ脇に一等航海士が携帯電話で船長と連絡を取り、程なく3名の実習生が下りて来て、私に背中を向けます。ああ……「背負って上げます……」と言うのだなと理解しました。私より早く来た数百人の人たちが順番を待っているのに、思えば「ありがたく、また申し訳ない」気持ちで胸が熱くなりました。車いすの私へのご理解とご厚意を無にはできません。また背負われるのを感謝こそすれ、卑屈になる必要はない。ここはプラス思考で割り切ることだと自分に言い聞かせていました。

車いすも直ぐ後ろから運ばれ、実習生が押しながら案内してくれました。私は難聴ですから説明はよく分かりません。「私も健康だったら船員になっていたでしょう。兄は元七尾海員養成所出身の船員でした。海運不況で今は漁業に従事しているが、友人や知人には元船員が多い」ことも話しました。日本丸のような帆船のことや貨物船、タンカーやコンテナ専用船、飛鳥のような豪華客船も話題になりました。俗に「話し上手は聞き上手」と言います。私たち聴覚障害者の場合は、話が一方的になりがちなのが気になりました。

船内見学と言っても船橋には出入りできません。甲板を回りながら日本丸の特徴などを見たり聞いたりです。百聞は一見に如かずで、見て回るだけでもいろいろなことが分かります。日本丸には二人の女性航海士が乗り組んでいました。海上保安庁のヘリコプター搭載型巡視船『えちご』にも女性航海士が一人乗り組んでいたから、今では女性航海士は珍しくないようです。「エンジンルームです」と言う実習生の声に車いすから立ち上がり、開けてあった窓から機関室を覗き込みました。大型のディーゼルエンジンが何台か並んでいます。日本丸は主に帆走します。しかし時化や緊急時にはエンジンを使い帆行します。また機関長や機関士を目指す学生の実習にも使われます。船尾の方に半円形に切った椰島の皮が数個ありました。これは甲板掃除の時に、切り口を甲板へ押し付けて磨く掃除用具です。屈んで力を入れて磨くかなり重労働です。もとより日本丸は鋼鉄船ですが、上級船員を目指す実習生の鍛錬のために、甲板掃除は大切な実習科目の1つなので甲板は板張りになっています。

甲板の最後部に操舵輪が、2メートルの間隔で2つ備えてあります。普通は見晴らしの良い船橋で操舵しますが、船橋の操舵輪の他に、もう1つ大きな操舵輪を機関室の上部に備えた貨物船もあります。日本丸も操舵法の実習に、船橋の操舵室からの「面舵(船首を右へ向ける)、または取り舵(左へ向ける)」指令に従って、船橋の操舵室から連結された鎖の動きに合わせて操舵教官の指導のもとに操舵技術を習得します。

甲板を一周した船橋近くのタラップ脇に、船長と一等航海士が待機していました。この機会に記念撮影をと思い、居合わせた航海士にカメラを渡し一枚撮ってもらいました。船長や一等航海士、写真を撮ってくれた航海士にもお礼を述べ、再び実習生に背負られて下船しました。背負ってくれた実習の学生さん、本当にありがとうございました。そして日本丸を撮るため埠頭を車いすで走り回り、船尾の方から、また船首の方から撮ったり一心

にカメラのシャッターを切っていました。写真を撮るだけでも……と思っていたのに、目的以上の成果がありました。このことは単に、日本丸を見学したり写真を撮ることができた満足感だけでなく、車いすの障害者へ対する『社会的理解の輪が、障害者と触れ合う機会の少ない船員まで広がっている』ことを意味します。日本丸に何の興味もなく、苑内に閉じこもっていたら味わい得なかったことです。

船舶は船長や航海士、機関長や機関士だけでは運航できません。上級船員と同時に甲板長や操舵手、甲板員、操機長や機関員。さらに司厨長や司厨員、航海中に破損したドアや船窓を修理する船匠(大工)、また無線通信士はいざという緊急時には、いなくてはならない重責を担っています。日本丸の任務は、主に将来の船長や機関長、一等・二等・三等航海士や機関士、無線通信士を育成するための航海練習船です。

港に停泊中の見ものとして、36枚ある全ての帆を張る総帆があります。出港の時、実習生全員が帆柱に登り片手で帆桁に掴まり、帆桁の下のロープを足場にして、帽子を振りながら別れの挨拶をする答楯礼があります。新聞記事の写真に掲載されていました。

今も七尾市関係当局で整理にあたった人たちに思いを馳せ、日本丸の船長始め乗組員と実習生に感謝しながら、七尾港の発展と日本丸の航海の安全、全乗組員の健康と実習生の未来に栄光あれと祈っています。

等伯まつり

次に七尾市ゆかりの画聖、長谷川等伯まつりへの参加。国宝『楓図』や重要文化財の梅と鶯などを描いた屏風図、猿の親子を描いた屏風。信春時代(七尾から、上洛後、等伯と名乗る)に描いた愛宕権現図、達磨図などを展示した『等伯展』の鑑賞です。今年七尾市の記念すべき年で、『等伯展』には京都の智積院所蔵の国宝『楓図』が特別出展されました。私は昨年の『等伯まつり』に献歌の予定でしたが、投稿の機会を逃していたので、今年こそはと満を待っていました。締切日は不明のまま、七尾市文化協会事務局へ送稿、採用になりました。佐田敏裕さんも『等伯祭終へ新涼の風に立つ』を献句しています。

☆市花つつじの花に囲まれ等伯碑公園の一角を占めて静もる

昨年4月11日、小丸山公園の花見をかねて竣工後、間もない『ゆったりトイレ』を見に行った折り、公園の一角にある等伯顕彰碑を見つけました。顕彰碑は市花つつじに囲まれひっそり静まり返っていました。つつじの花にはちょっと早かったが、七尾生まれの画聖『等伯顕彰碑』に市花つつじが相応しく思い、一首に詠みました。『等伯まつり』当日は時間前に行ったので、等伯が京都へ上洛後の半生を描いたビデオを鑑賞。記念茶会にも招



かれ抹茶をいただきました。午後は『等伯展』オープニングセレモニーの後、大勢の一般鑑賞客と七尾商業高校生が団体鑑賞に来ていました。特に国宝『楓図』の前は黒山の人だかりで、車いすでは近寄れません。仕方なく、後日改めて鑑賞に行ってきた。『等伯展』へは何かを学ぶため毎年鑑賞に行っています。なお、第19回折口博士父子記念歌会へ参加しましたが、紙数の都合で割愛します。

1999年11月27日記

マイ・ブックスルーム

だから、あなたも生きぬいて

大平 光代著 発行所：講談社 定価：本体1,400円+税

この本はベストセラーですので、皆さんはよくご存知だと思います。

中学時代に転校先の中学校でいじめに遭い、自殺を図った彼女。イジメの章を読んでいて、現在の学校は何故、解決できないのかと思いました。

学校を卒業後、不良仲間とのつきあい、組長の妻など人生のどん底を体験し、叔父の大平さんとの再会によって、再スタートを切ったのです。独学で司法試験を合格し、現在は弁護士活動をしている彼女のドキュメンタリーです。

いくらどん底の人生でも、いつかは解決の道があり、やり直せることを教えられます。

編集後記

今回より介護の話題を本格的に取り組んでいきます。まだまだ試行錯誤ですので、ご迷惑をおかけすると思います。今後、さまざまなご意見を聞き、充実させていきたいと思えます。

また、今夏よりインターネットができる環境が整いますので、メールでのご意見をお待ちしております。ホームページも充実させて再開したいと思っています。

金沢市在住のイラストレーターM.Tさんよりイラストをお寄せいただきました。ありがとうございました。(Z.0)

川柳裏表紙

昭和61年10月、母を癌に奪われ、独りになった私は淋しさに耐えられず、半年後以前からつきあっていた現在の妻と結婚を決意。

右半身麻痺で歩行も困難な彼女、日常生活も多分に介護が必要で、妻の曲がった脚は私たち夫婦が背負う「運命」だった。

その運命を大きく変えたのは私の自動車運転免許取得だった。行動範囲が大きく広がり、その車に車いすを積んで日本各地への観光ドライブだ。その記録トラベルエッセイ「車いす旅日記」は今も脱稿中である。(比)